

2021年度第2回入学試験問題

国語

「始め」の合図があるまでは問題を見てはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は2ページから8ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・座席番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎカッコ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字はていねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

— 次の文章を読んで、後の間に答えなさい。

いつも若菜家の中心にいた母は、重い病気にかかり徐々に衰弱していった。「僕」（浩介）、弟の俊平、そして父の三人は、それでもなんとか家族の歯車を回し続けようとしていた。そうしたなか浩介は、「俳優みたいでカッコいい」見た目だけでも、家族の危機に際してふがいない姿を見せる父を尊敬できずにいた。浩介は父に尊敬できる存在であってほしいと望んでいたが、弟の俊平は現状の父をありのまま受け入れていた。

次に俊平と二人きりで話をしたのは、その半年後、母が息を引き取った日の夜だった。「家族みんなで海のそばに住んでみたい」「大きい家で暮らしたい」という夢を叶えてやることはできなかったが、病気をしたあとにできた新しい家族にも見守られて、最期は微笑むようにして眠りに就いた。発病から六年半後のことだった。

通夜の晩は嵐のような雨風が吹き荒れていた。変化を望んだ僕と、望まなかった俊平。兄弟の間に正反対の二つの願いがあったのだとしたら、父が叶えたのは弟のものだった。

重苦しい空気が充滿する真夏の葬儀場で、喪主としてマイクの前に立った父は、涙を堪えることができなかった。

用意していた紙を手にし、なんとか口を開こうとするものの、言葉が出てこない。孫の健太の「じいちゃん！ がんばれ！ がんばれ！」のかけ声もむなしく、ついにみんなの前で号泣し始めた父は、「浩介、すまん。あとは頼む」という一言を残して、逃げるように奥の部屋へ引っ込んでしまった。「兄貴はこれからも大変そうだな。引き続き若菜家をよろしく頼むな」という小馬鹿にした俊平の声が、いまま耳に残っている。

別室から聞こえてきた情けない父の泣き声も、あの日の強烈な雨音とともにあざやかに心に残っている。

☆

二年前の雨がウソのように、空には雲一つ浮かんでいない。母の三回忌は、通夜で経を唱えてくれた僧侶の寺で行うことになった。

母の友人を中心に、たくさんの方が来てくれた。嵐で参列できない人もいた通夜の日より多いくらいだ。

法事が始まるまで、まだ二十分くらい時間があった。みんなが和気藹々としている寺の境内に、健太の姿が見当たらない。どちらかと言うと内向的な僕や妻の深雪に似ず、小学校四年生になった健太はどういうわけか活発だ。

探していた姿は本堂の裏にあった。そこに設置された喫煙所で、健太は叔父である俊平とじゃれ合っていた。「もう、煙たいからタバコやめなよ！」などと鼻をつまみながらも、健太は昔から俊平になついている。

「ねえねえ、俊平おじちゃんって昔はモテたの？」

俊平が新しいタバコに火をつけようとしたときだ。想定外の健太からの質問に、俊平は「おつ」という表情を浮かべる。

「昔はってなんだよ。俺はいまでも普通にモテるぞ」

「ううん、それはウソだよ。お母さんが言ってたもん」

「なんて？」

「あの兄弟はモテないって。性格は全然違うけど、そこだけは一緒だって」僕がいることに気づかず、健太はずいぶんなことを言っている。さすがの俊平もやりづらそうに鼻をかいたが、僕を見つけるといたずらっぽく微笑んだ。

「いやいや、健太の父ちゃんだって昔は結構モテてたぞ。なんだよ、お前。好きな子でもできたのか？」

「べつに。そんなんじゃないけど」と、健太は頬を赤らめた。1 俊平の目もとが意地悪そうに歪む。

「ま、どっちでもいいんだけど、お前がモテないのを俺たちのせいにするなよな。お前がモテないのはお前のせいだ。DNAのせいじゃない」

健太が口をとがらせて俊平のすねを蹴ったとき、見たことのない壮年の男

性が汗を垂らしながら喫煙所にやって来た。

健太はあわてて僕の背中に身を隠す。気に入った人間にはよくなつくけれど、基本的には人見知りだ。そんなところは親に似た。

「ああ、今日は暑いねえ」と言いながら、男性はシャツの襟元をパタパタと扇ぎ、ポケットからシガーケースを取り出した。

「今日はわざわざありがとうございます。あの——」と丁寧に頭を下げ、名前を聞こうとするより一瞬早く、男性は楽しそうに肩をすくめた。

「君たちのお父さんはよくモテたよ。僕のおじいちゃんだね。学生時代、それはもう信じられないくらいモテたんだ」

「え……？」と、健太が目をパチクリさせる。

「すまないね。さっきの君たちの会話が聞こえてしまつて。邪魔するつもりはなかつたんだけど——」

父の高校時代の同級生なのだという。高畑と名乗った男性はA好々爺然と目を細め、おいしそうに煙を吐き出した。

思わず俊平と目を見合わせた。本音を言えば、どうでも良かった。自分の父親が高校時代によくモテた話になんて興味はない。

俊平も同じなのだろう。すぐに退屈したように身体を揺らし始め、僕の背後の健太にちよっかいを出す。

高畑さんは僕たちの気持ちを察してくれなかつた。真つ青な空をまぶしうに見上げながら、淡々と続ける。

「あれはいつだったっけなあ。たしか高二の頃だったと思う。うん、夏だった。君たちのお父さんをめぐって二人の女性が取っ組み合いのケンカを始めたんだ」

「え、なんですか？」

「音楽の教師と、歴史の教師。二人ともそれはキレイな人でね。学校中の男たちの憧れの的だった。その二人が、君らのお父さんをめぐって大ゲンカを始めた。あれはすごかつたなあ。すごすぎて若菜をやっかむ気にもなれなかつたよ」

ふと見た俊平は大口を開けていた。「あんぐり」という表現がふさわしい、

はじめて見るような顔をしている。(略)

健太も「じいちゃん、超スゲー！」と、瞳を爛々と輝かせた。僕も無意識に口を開いた。

「あ、あの、そのとき父はどうしたんですか？」

「うん？」と首をひねった高畑さんに、今度は気持ちを鎮めながら問いかける。

「いや、二人の女の先生が父をめぐってケンカをしたんですよね？ そのとき、当の本人は何をしていたのかなって」

「ああ、それはね——」と、高畑さんは静かにタバコを揉み消し、ただでさえ細い目をますます細めた。

「一人でジーパーンを洗つてたよ」

「はあ？」

「どうしても色の落ち具合が気に入らないとか言つて、校庭の水飲み場で一心不乱にジーパーンを洗つてたんだ。校舎の窓から見たその光景を僕は忘れられないよ。そのあとにあいづが先生たちのケンカのことを知つたのか、知つたとしたらどうしたのか、そのへんのことにはさっぱり覚えてないけどね。ジーパーンを洗つていたことだけは絶対だ」

再び俊平と目が合った。互いの顔にじわじわと笑みが滲んでいく。一瞬のズレもなく、今度は二人そろって吹き出した。

僕たちと一緒に笑いながら、「俺、ちよつとじいちゃん探してくる！」と、健太が駆け足で去っていく。

そのうしろ姿を見送りながら、僕は高畑さんに頭を下げた。

「いやあ、ちよつとホントにすごかつたです。おもしろいエピソードを聞かせていただきました。ありがとうございます。なんて言うんでしょう。僕は、はじめて父のことを——」

「尊敬した？」と満足そうに微笑む高畑さんに、僕は苦笑しながらうなずいた。

「そうですね。悔しいですけど」

「そうか。それは良かった。これは若菜に貸し一だな」と言つて、高畑さん

が新しいタバコをくわえようとしたとき、父が一人でやって来た。

「おお、高畑。ここにいたのか。今日は遠いところを悪かったな」

「なんの、なんの。嵐で電車が止まっちゃって、玲子ちゃんの通夜には参列できなかったからな。ずっと気に病んでたんだ」

「とんでもない。こうして来てくれただけで嬉しいよ。それよりお前、まだタバコなんて吸ってるのか」

「ん？ ああ、これか。わりと長い間やめてただけだな。また最近……。なんかちよつと自棄になっちゃって」

「自棄？」

「うん。(注)春からの一連の騒動で、俺は結局店を畳むことに決めたから」

「ああ、そうか。そう言ってたな。でも、だからって自棄になっていいことなんて一つもないぞ。気持ちはわかるけど、俺たちももう七十だ。身体も労ってやらなきゃ」

「まあ、そうだよな。わかっただけはいるんだよ。でもな……」とつぶやき、一度は口を閉ざそうとした高畑さんだったが、さびしげな目をゆっくりと父に戻した。

「なあ、若菜さ。また元の世界に戻る日って来ると思うか」

「うん？ どういう意味だ？」

「俺たちはもう以前とはまったく違う世界を生きているんだよなって、ついそんなことを考えてしまうんだ。空の色は何も変わらないのって思うと、なんとなくX的な気持ちになっちゃってな」

そのまま視線を上げた高畑さんに釣られるように、父も青い空を見上げた。僕はボンヤリととなりの俊平に目を向ける。

つい数日前、お互いの家族を伴って実家に行ったときのことだ。なぜかそれぞれの子と父だけが買物に行くという流れになって、俊平と二人で家に残された。

気まづいわけではなかったけれど、いつも通り会話は弾まなかった。なんとなくつけていたテレビではワイドショーをやっていて、それを睨むように見つめていた俊平が独り言のようにつぶやいた。

「そんなに元の世界が良かったのかよ」

ふつと我に返る気がして、僕もテレビに集中した。画面には有名な小説家という人が映っていて、その人がどこかBしたり顔で『私たちはもう元いた世界に戻ることはできないんです』というようなことを言っていた。

まるで目の前に小説家がいるかのように、俊平は毒づき続けた。

「なんでテメーは元の世界をまるっと肯定してるんだよ。一年に二万も、三万も人が自殺してた社会が本当に正常だったのか？ 感傷に浸る前に何か変えろよ。もっといい世界にするための努力をしろよ」

父は空を見上げながら満面に笑みを浮かべた。そして古い友人に向け、あの日の俊平とよく似たことを口にした。

「戻るに決まってるよ。いや、元の世界なんかよりずっと良くなるに決まってる」

風がやみ、誰の話し声も聞こえなかった。不意に立ち込めた静寂を拒むように、父はその理由を説明した。

意外と理屈っぽく、大上段に構えがちな俊平とは違い、父が語った理由はとてもシンプルで、父らしいものだった。

「悪夢を見たあとはいい夢が見られるし、大雨のあとには必ず快晴が待ってる。そういうふうになってきてるんだ。俺たちがまさにそう。玲子の闘病はもろろん大変だったけど、2あの苦しい時期を乗り越えてきて俺たちの家族は**最強だ**」

「最強？」

「ああ。いまでは玲子が置いていってくれたプレゼントだったとさえ思ってるよ」

呆れたように苦笑する高畑さんの背中を父が叩いて、二人は先に本堂へ向かった。ぼつんと取り残された喫煙所で、俊平がおどけたように尋ねてきた。

「そうだったの？ 最強なの？ 俺たち？」

「さあね、どうなんだろう」

「いやいや、全然違うでしょ。っていうか、俺たちこそ何も変わってなくなっていく？ オフクロの病気があったからって、俺たちの関係は何一つ変わってな

いじゃん。親父のあの溢れんばかりの自信はいつたどこから来るんだよ」

「それはよく知らないけどさ。でも、3意外と『俳優みたいでカッコいいこと』が理由じゃなかったのかもしれないな」

「はあ？ なんだよ、急に」

「あの人がモテたっていう理由だよ。いまのお父さんはなかなか良かったもん。いまのは少しだけ感動した」

僕の顔をマジマジと見つめ、俊平は本気でバカにするように鼻を鳴らした。そのとき、健太が血相を変えてやって来た。

「ねえ、二人とも何してるの！ もうそろそろ始まるって、お母さんたち怒ってるよ」

「ああ、わかった。すぐ行く」

「早くしてね！」

あの悪夢のような出来事を経て僕たちは生まれ変わったのか、母の闘病生活乗り越えて家族が最強になったのか、正直、僕にはわからない。

ただ、わかることが一つだけある。まだ物語は途中であるということだ。たとえ誰かが去ったとしても、また新しい誰かが輪の中に入ってきて、ぼくたちの家族の物語はこれからも続いていく。あの日、歯車を必死に回し続けた先にあつたのは間違いなく希望だった。それだけは、きつと正解だ。

そういえばワイドショーを見ていたとき、俊平が一ついいことを言っていた。その物語がより良いものになるためのことなら、僕も努力を惜しまない。

「近々、お父さんと三人でメシでも行くか」

空はますます青色の度を増している。

「はあ？ 今度はなんだよ」

「たまにはいいだろ。お父さんから、『女教師取っ組み合い事件』の顛末がどうだったか聞いてみようぜ」

ほんの一瞬、俊平は興味をひかれた顔をした。

でも、振り払うように言い放った「いや、俺はいいよ。面倒くさい」という言葉は、4不思議と耳に心地よかった。

(早見和真「それからの家族」

『小説トリッパー 二〇二〇年夏季号』(朝日新聞出版)より)

(注) 春からの一連の騒動：新種の疫病が流行し、世の中が混乱していた。

問1 傍線部1「俊平の目もとが意地悪そうに歪む」とありますが、このときの俊平の気持ちの説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 子供のくせに生意気な質問をしてきた健太が小憎らしく、この際こらめてやろうと考えている。

イ 臆することなく大人に注意をするような健太にも、うぶなところもあると分かり可愛らしく感じている。

ウ 思った通り健太には好きな子がいるのだと確信し、そのことで少しからかってやろうと思っている。

エ くだらないことを聞いてくる健太がうっとうしく、さっさと話しを終わらせたいと思っている。

オ 健太が隠したがっている好きな子への好意を言い当て、自らの推理的確さに酔い得意になっている。

問2 傍線部A「好々爺然と」・傍線部B「したり顔」の意味として最もふさわしいものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

A 「好々爺然と」

ア 親しみやすい顔つきで

ウ 余裕のある老人にふさわしく

オ 人の良いおじいさんらしく

イ 紳士的な態度で

エ 親友らしく振る舞って

B 「したり顔」

ア 真剣な顔

イ 得意げな顔

ウ 悲しげな顔

エ 自信に満ちた顔

オ 不安げな顔

問3 X に入る最もふさわしい二字の熟語を、 X より後の本文中から書き抜きなさい。

問4 傍線部2 「あの苦しい時期を乗り越えてきて俺たちの家族はいまが最強だ」とありますが、父のこのことばをきっかけとして、浩介は家族の未来についてどのような思いをいだくようになりましたか。本文中のことばを用いて、解答欄に合うように三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問5 傍線部3 「意外と『俳優みたいでカッコいいこと』が理由じゃなかったのかもしれない」とありますが、父が「モテた」のはなぜだと浩介は考えているのですか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 父は、気取らない人柄であり、物事を自然と前向きに捉える姿勢によって周囲の人を勇気づけることもできるから。

イ 父は、どのような困難に直面しても家族の結束を第一に考えるような、愛情に満ちた頼りがいのある人物だから。

ウ 父は、包容力に満ちた雰囲気をもっており、不安や寂しさを感じている時にそっと寄り添いつつ癒してくれるから。

エ 父は、大切な人や想いを寄せる人に対して、自分の気持ちを情熱的に伝えることにいつも長けているから。

オ 父は、繊細で思慮深い性格であり、相手の立場や状況を思いやりつつ優しく接することができるから。

問6 傍線部4 「不思議と耳に心地よかった」とありますが、なぜ浩介はこのような感じたのですか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 父の高校時代について話を聞こうと提案したものの、自分も俊平と同様に本当は面倒くさいと感じていたから。

イ いつも自分を小馬鹿にしてくる俊平が、父との会食に来る気がないことがわかりひそかに安心したから。

ウ 内向的な自分と比べて、自分の意見をはっきりと言うことのできる俊平の言動が痛快だったから。

エ 一見冷淡なそぶりを見せる俊平だがそれは家族と関わることの拒否ではなく、これからも家族としてつながっていくのだろうと思えたから。

オ 口では父と話をすることが面倒だと言いつつ、父の過去を掘り返さない配慮が俊平なりの親孝行なのだ と理解したから。

問7 この文章の内容や表現の説明として誤っているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 登場人物各々が個性的でありながらも、しばしば親子や兄弟などで似ているところが描かれ、家族のつながりが暗示されている。

イ 家族の支柱であった母を失った若菜家が、母を忘れることで、新しい家族として再出発するさまが描かれている。

ウ 家族が知り得なかった父の過去を知る高畑さんの登場は、浩介のいづく父への気持ちを変えていくきっかけとなっている。

エ 母の通夜の暴風雨から三回忌の晴天へという変化は、若菜家のありようの変化と連関する情景描写となっている。

オ 「一連の騒動」が起こっている世の中の今後と、苦しみを経験した若菜家の未来が重ね合わされている。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

人間の面白いところは「前」と「後ろ」があるところである。目がついて
いる方、鼻がついている方、口がついている方が前である。耳は横について
いるが、なぜか耳たぶがついていて、前からの音だけを聴く。人間は丸い世
界の中に生きている生き物のはずなのに、前しか見ることができない、前を
向いてしか喋る（しゃべ）ることのできない、前からくる匂い（にお）しか嗅ぐ（か）ことができない、
前からくる音しか聞くことができない存在である。全能の神からすればずい
ぶん不便な形に人間を作られたものである。後ろには排泄（はいせつ）のための**aキカン**
しかない。不思議だ。でもそれにはきつと1意味がある。

その意味を考えてみると、僕たちは前を向いた世界の半分としか向き合え
ず、その世界の半分について一所懸命、目や鼻や耳や口の力を用いて観察し
たり理解したりする。そして理解をすれば、この世界に対する優しさを身に
つけることができる。だが、後ろにも目や鼻や口があったら、もっと優しく
なれるかもしれないというのは間違いである。語りかけられない後ろ、聞こ
えない後ろ、それは観察することはできないが想像することはできる。どん
なものがあるんだろう、どういう声を発しているのだろう、どういう匂いを
発しているのだろうと、僕たちは一所懸命想像する。その想像をすることが
また優しさを生む。

映画の中では俳優は鼻や口や相手から聞こえる耳を一所懸命使って演技を
する。しかし、俳優は後ろ姿で演技をする。目も鼻も口も何もない後ろ姿で。
後ろ姿を見るとなぜか僕たちはその人の優しさや悲しさや喜び、願いや夢を
見ることができると。つまり、後ろ姿からはその人物の心を感じることができ
る。僕たちの想像力がそれを捉えるのである。

心とは何か。どんなに目を見開いても見ることはできない。どんなに語り
かけても心は答えてくれない。しかし、目を閉じると心が見える。心の声が
聞こえてくる。心とは**W**力ではなく、**X**力の世界にあるのだ。（略）

人間に前と後ろがあるように、世界にも昼と夜とが同時にある。人間がこ
の地球上で幸せに生きていくことを考えたら、一日中昼の方がよく見えるし、

何でも情報になるし、便利で**bカイテキ**なはずである。それなのになぜ、一
日の半分は何にも見えない、不便な怖い夜なのだろうか。

人間は一日の半分の昼間、一所懸命世界を見つめ、観察し、理解する。し
かし一日の半分は、見えない闇（やみ）の中で思いやる。想像する。そして優しさを
身につける。世界に対して本当の優しさを得ることができると。そのように僕
たちは神様から作られてきたわけである。僕たちには、後ろ姿や闇が大事な
のだ。けれども見えないということは不便である。そして恐ろしい。誤解も
生まれる。そこで、見えない闇の中で何かを見ようという好奇心によって、
見えないものが見えるようになった。

今は、夜でさえも明るい。ビデオやカメラによって見えないはずの後ろの
世界が見えるようになった。現代の科学文明の力である。今の東京大学が
帝国大学と呼ばれていた時代の入学試験で、「神様があなたの体にもう一つ
目をつけて下さるとすれば、あなたはどこにほしいですか」という問題が出
されたそうだ。多くの学生は「背中にほしい」と答えた。たしかに背中に目
があれば、世界をまるごと見ることができると。しかし正解は小指の先だった
のである。小指の先に目があれば、後ろだけではなく、例えばポケットの中
でも耳の穴の中でも覗き込む（のぞ）ことができる。世界をすべて**Y**化すること
ができる。

これが僕たちの願望だったのである。その力によって科学文明を発達させ
てきた。だから、ビデオやカメラや情報機器は、神様が与えてくれた小指の
先の目だといえるのではないか。それを使うことで、世界をまるごと情報と
して捉え、観察し、理解してきた。しかしそれによって幸福になったかとい
えば、どうもそうではないようである。

なぜか。背中の後ろの見えない部分を、夜を、世界の半分の闇を失ったか
らである。飛行機や新幹線を得て便利になったけれども、馬の背で旅をする
幸福感を失ったのである。ここに僕たちが生きる難しさがある。行き過ぎた
科学文明は凶器となり、人間を滅ぼしてしまふ。その行き過ぎた科学文明を
幸福に使う力、文明が凶器になる部分を**c**緩やかに穏やかにする力こそが文
化なのである。

文化とは本来、暗いもの、古いもの、遅いもの、科学の技術の高さのかわりに深みのあるもの、便利になるかわりにゆっくりと考える力のことである。芸術・美術とは、科学文明の力に対して、文化の力の強さや素晴らしさを学び、そこから **Z** 人間の力を得ることである。

この百年は科学文明の世紀だった。あるいは映像の世紀だった。すべてが **Y** 化され、闇が昼になった。そして同時に、戦争の世紀でもあった。自由に夢を見て、その夢を自由に表現しようとする欲望が、人の夢を奪い、自分の夢だけを実現しようとして戦争を生んだ。これからの僕たちは自分の夢よりも人の夢を大切にし、便利さだけではなく、不便さも大切にし、我慢の力を尊び、そして真の人間の幸福を考えていくようにならなければならない。僕たちは、**2** 「人間がA地点からB地点に移動するには馬が一番ですよ」と言ったレオナルド・ダ・ヴィンチの言葉の意味を、もう一度考え直さなければならぬと思う。

(大林宣彦「芸術」)

角川文庫編集部編『いまを生きるための教室 今ここにいるということ』
〔角川書店〕より

問1 傍線部 a、c のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問2 傍線部 1「意味がある」とありますが、それはどのような意味ですか。解答欄に合うように二十字以上三十字以内で答えなさい。

問3 **W**・**X** に入る最もふさわしい二字の熟語を、本文中からそれぞれ書き抜きなさい。

問4 **Y** に入る最もふさわしいことばを次から選び、記号で答えなさい。

ア 情報 イ 細分 ウ 自由 エ 立体 オ 具体

問5 **Z** に入る最もふさわしいことばを次から選び、記号で答えなさい。

ア 何とか戦い抜けるだけの
イ 社会に従属した本来あるべき
ウ 想像し得ないほどの絶対的な
エ 世界とまるごと共存できる
オ 自分の夢を実現できる

問6 傍線部 2 「人間がA地点からB地点に移動するには馬が一番ですよ」と言ったレオナルド・ダ・ヴィンチの言葉の意味を、もう一度考え直さなければならぬと思う」とありますが、筆者がこのように思うのはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 様々な欲望によって大きな争いや災いが生じることは歴史的事実であり、これからも避けられない宿命と考えられるから。

イ 人間たちが欲望のままに近代的技術を用いることにより、結果的に戦争が回避され世界平和が実現されるから。

ウ 人間は不便さを共有して生活しているが、それは時に優しさにつながる反面、災いの火種にもなりかねないから。

エ 見えない物事を見ようとすることによって人間は幸福感を失ってしまうため、想像力を用いて幸福感を補う必要性があるから。

オ 行き過ぎた科学文明は、戦争などの人間を滅ぼす事態を生むため、あえて不便を受け入れることが幸福につながるから。

